
異世界の天秤

城川 一二三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の天秤

【Nコード】

N8977H

【作者名】

城川 一二三

【あらすじ】

皮肉屋でリアリストな女子高生・叶子^{かなこ}は突然不審者に会い、一
緒に来いと言われるが――

1・不審者との遭遇（前書き）

所謂処女作です。

緊張してます。

どちらかというとライトノベルよりなので、純文学が読みたい人には向きません。

更新は遅めだと思います。

わりと作者のテンションによって書かれたものなので、あまり期待はしないでください。

以上を踏まえて、どうぞ読んでやって下さい。

1・不審者との遭遇

「ちょっとそこ行くお嬢サン」

「へ？あたしですか？」

塾からの帰り道の周りには外灯の灯りしかない路地裏で、突然あたしは声を掛けられた。

「ええ、そうデス。アナタですヨお嬢サン」

「はあ、えっと、何でしょうか？」

顔を上に向けないと顔が見えない長身。

「アナタ、私が見えますか？」

浅めにかぶったシルクハットに、奇術師のような燕尾服。

「はあ？え、えっとはい・・・見えますけど」

お金持ちのお年寄りが掛けていそうな片方しかない眼鏡。

「では声ハ」

「・・・・・・こうして会話してるじゃないですか」

ハロウィンのお菓子の様な形のステッキを、器用にくるくると回す。

「ククク・・・気のお強いお嬢さんダ」

「それはどうも。もう帰っていいですか？」

愉快そうに細められた瞳はエメラルドグリーン。軽薄そうな笑み

を浮かべるその顔はそこら辺の男たちとは一線を画すほどに整っている。

「それはダメだヨ。アナタは私と一緒に来なくてはならナイ」

「．．．．．よく人から回りくどいって言われませんか？」

「クク．．．厭味な性格は嫌われるヨ？」

「じゃあ嫌って下さい。そしてそのまま去って下さい」

やれやれといった風に溜め息を吐き、肩のあたりで切りそろえられた亜麻色の髪は彼の頭の動きに合わせてだらりと垂れさがる。

そして虚空を向いて独り言をつぶやいた。

「もしもし、キミかい？．．．ああ、中々に難しいネエ．．．．．ええ？．．．．．ダメダメダメ。彼女は私が育てるんだからネエ。キミに干渉の余地ナシだヨ．．．．．ソレはズルいナア．．．．．仕方ないナ、少しだけだヨ？」

誰かと会話しているのか、怪しさこの上ないが。彼に育てられる子は可哀相だな。

「ゴメンネ、ほったらかしてサ」

「いえ結構です。このままずっとほっておいて貰っても構いませんでした」

「クク、そう言ウ割には律儀に待っていてくれていたじゃあない力」
「家の家訓に、人との会話は最後までっていうのが有るので」

すまなそうな素振りなど僅かも見せずに、一層笑みを深めて、頬をしゃくる。

「イイナア。私のホームにもそういう家訓が欲しいナア。話を聞い

てくれナイ奴が多いンだヨ。私のホームにはネ」

こいつには家族が居たのかという事に軽く驚愕しながら、こいつも話を聞かんやつでは無いかと内心呆れてしまう。

「それは大変ですね。じゃああたしはこれで」

そう棒読みで言ったあと足早に彼の横を通り過ぎようとするが、にゅっと長い腕が伸びてきて通せんぼうする。

「つれないナア。もう少しおハナシをしない力？イイモノをあげるヨ？」

「知らない人から物をもらっちゃいけないんです。常識ですよ？あたし非常識な人は嫌いなので。腕を退けて下さい」

彼の腕を掴み、力いっぱい振り払おうとするが、余程彼の力が強いのか、私が弱いのか、ビクともしなかった。

「……………だいたい、何ですか？こんな時間にそんな格好でこないたいけな少女の通行の邪魔をする変質者って。警察呼びますよ？ここで叫びますよ？いいんですか？」

「いたいけな少女は自分でいたいけだナンて言わないヨ」

目に力を入れて、呆れ顔の彼の目をじっと見る。その間にも鞆の中に手を入れて、携帯電話を探すが、見つからない。

私の顔に、焦りの表情が浮かび始めた頃。彼はにたりと勝ち誇るように嗤った。

「アナタの探シ物はコレかい？ククク、コレじゃあ警察に電話できないネエ、クククク」

ストラップに指を掛け、ぷらぷらと見せびらかす様にあたしの携帯電話を持ち上げる。

「なら叫べばいいんです。貴方馬鹿ですか？どうやったかは分からないですけど、ケータイ取ったぐらいでいい気にならないで下さい」

そう強がったが、理解の範囲外の事が起きているなか冷静で居られるほどあたしは強くない。恐らく声が震えていただろうし、背中は汗でびしょ濡れだ。

「クカカカ、強がらなくてもイインダヨ？怖ければ怖いと泣けばイイ。か細い腕でその身を抱きしめ、神にでも母にでも助けを請うが良イ。だがこの世は無情ダヨ。こんな人通りのナイ路地裏では母に声は届かナイし、まして神など降りてきやしナイ。神は平等ダ。アナタの所にダケ来るなんてエコ最賤しないヨ」

益々目を細めると、あたしの顔にずいと顔を近づけ、カラカラと楽しげに嗤った。

こいつは相当な性格破綻者だ。あたしが負の感情を見せれば見せるほどこいつの喜びは増してゆく。

「あたし共産主義なので」

「なんというナルシストッ！」

「どうとでも。自分の素晴らしさをひけらかして何が悪いんですか？」

「別に悪いなんて言ってないサ。ただ——」

「ただ？」

突然にやにやと笑っていた顔が真顔になる。

ずっと細められた瞳。北欧人じみた高い鼻梁。一文字に結ばれた唇は、男のくせに艶めかしい。顎に手を添え、ものを言わぬこいつは驚くほど美しい。こんな出会い方をしていなければ一目ぼれをしていてもおかしくは無いだろう。

ふいに、艶やかな唇が小さく開いた。

「アナタ、カワイイネエ」

——気持ちが悪い。

猫なで声に似た様なゾツとする声を出し、にいい、と犬歯が見えるまで口角を上げ、瞳は爛々と見開かれている。

やばい。こいつは本物の危ない奴だ。

踵を翻し、駆け足で逃げる。だがこいつはそれを許さなかった。

「ダメダメダメ。逃がさないヨ。言っただろう？アナタは私と一緒に」

「行きま、せんっ！」

五十メートル走校内二位の実力を持つあたしの俊足に、平然とした顔をしてついて来る。

それどころか必死で走るあたしの横に並んでべらべらと喋る余裕さえある。

底の知れない奴だ。

「ドウシテ逃げるんだい？」

「当たり前、前、ですっ！」

「ドウシテ当たり前前ナンだい？」

「・・・っ」

「ダンマリはあんまりだナア」

その曲がり角を曲がれば人通りのある交差点に着く筈だ。
残り僅かな体力を振り絞り、全力で走る。

「っは・・・！！？」

無い。交差点がどこにも無い。

目の前に広がるのはさっきまで居た外灯のある路地裏。
振り返ってみたが、今まで通って来た道だ。ゆっくりとあいつが
歩いて来る。

「なん・・・で・・・」

「ダカラ言っただじゃないか、逃がさないとネエ」

にやにやと厭らしい笑みを絶やさず、歩み寄ってくる。

こいつはこの顔しかできないのか。もしそうだったら可哀そうな
話だ。

「しつこい男は嫌われますよ」

「それじゃあ引いてみようカナ」

「賢明な判断です。それじゃあどっかに行つて下さい。そして二度
と来ないで下さい」

「ウーン・・・それじゃあまた明日ネ」

ばいばい、と変わらず粘着質の笑みを浮かべて手を振り、足から徐々に消えていった。

こんな体験をしたのはおそらくあとしぐらいだろう。

緊張が解けたせいか、へなへなとその場にへたり込んで、独り呟いた。

「帰り道変えよう」

2・拉致（前書き）

かなり短いです。

ごめんなさい。

連投なので、あせった結果がこれです。
笑ってください。

2・拉致

最近足が筋肉質になってきた気がする。

原因は“奴”だ。謎のイケメン不審者。

毎週水曜と土曜は塾の日である。それと共に不審者が来る日でもある。

あの最初の遭遇から昨日までおよそ一か月間、変わらず奴はきちり十時半の帰りの時間に合わせてあたしに近寄って来るのだ。でもまああたしも黙ったままじゃない。それに合わせてあたしは何度も何度も帰り道を変えて帰宅する。

しかし侮る事なかれ。

あたしに発信機でも着けてるんじゃないかと思うぐらいの遭遇率なのだ。実に百パーセントである。一体何者なのだろうか奴は。

何時も言う事は一方通行で、“一緒にオイデヨ”とか“イイモノあげるヨ”とかあたしの言う事をまるで聞いて無いようにべらべらと話す様子は、鬱陶しさを越えて滑稽に思えてくる。まあ三十回も見ると飽きるものだが。

ただ、最近悩みがある。

よくもまあ飽きないものだと思心する一方、そろそろ諦めるという苛立ちが積み重なる日々はあたしにストレスを与え、あたしの自慢のサラサラストレートヘアのキューティクルにダメージを与え

つつあるのだ。

あたしの様な乙女には重大な問題だ。

そんな迷惑な日々がいつまで続くのだろうか、なんと天に祈った事か。

神は天にいまし、全て世は事もなしと言った赤毛の少女にあたしの現状を是非とも見てもらいたいものである。

まああたしは彼女ほど苦労していないのだが。

「それで、貴方ですねですか？」

あたしは今新たな挑戦者と対峙していた。第二の不審者である。

「某はカルトフス・ツー・ティアローニアアルトリウスである」

「彼は貴族ナンドヨ？ モット敬意を払わないとダメじゃあない力。まあソナ不遜なトコ

口が可愛いのだけでもネエ、クククク」

相変わらずにやにやと厭らしい笑みを浮かべるこいつは、楽しそうに喉を鳴らしながらその貴族とやらと肩を組んでいる。そっくりその言葉を返してやろう。お前が敬意を払え。

心の中で悪態をつきながら、貴族とやらを見る。

ピッチリとしたオールバックの白髪はポマードでがっちり固められている。

「そうですね。それでストーカーさんはカル・・・貴族さんと一緒に懲りもせず飽きもせず無駄な事にまたあたしの所に来たわけですか？」

ね？ 援軍つてやつですか？ あたし地位とかに屈しないんで」

燃えるように紅いルビーの如き瞳は窪んでおり、目じりの皺が彼の年齢を物語る。

「ストーカーさんつて私のコトかい？ …アレ？ アナタ共産主義じゃナカッタ？」

白髪の中に僅かに残る青色の髪が、元が青い髪だった証。

「は？ 信じたんですか？ 今の時代ブルジョアなんて流行りませんよ。一々人の言う事信じるなんて愚か者ですよ。あたし愚かな人嫌いです。という事でさようなら」

新調したばかりなのか、ピカピカのスーツに身を包んだ彼の口元には、髭。

そう、カイゼル髭。紳士の証。

「待たれよ。某はそなたに用が有るのだ。故に其処からそなたが動く事を某は良しとせん」

なんと回りくどい口調なのだろうか。しかも、某、某、と何度も自称する様子はまるでブリっ子が自分の事を名前で呼ぶように見える。いい歳のおじ様が、だ。

想像するだけで寒気がする。まあ目の前に現物が居るのだが。

「はあ、じゃあ如何しろと」

「某と来い。故にそなたはベルモンドの言葉に、そして某の言葉に従わねばならぬ」

ベルモンド。恐らくストーカーさんの名前であろう。

と言うかなんだ。こいつも結局ストーカーさんと同類では無いか。

いつもなら聞く耳を持たない。だけど今日はそろそろ疲れていたし、ここまであたしを求める理由は何なのかが気になった。そして、ついうっかり、言ってしまったのだ。

「……まあ、ちょっとなら、いいですよ」

それがあたしの運の尽き。

足もとから立ち上るドロドロとした靄はあたしの意識を奪おうとされていて、意識を失う直前に見えたのは、二人の満面の笑みだった。

「ち、くしょう」

靄が晴れた後、叶子は消えていた。

「イヤア、思ったヨリ手こずっちゃったネ」

「某は最初に言っただ、某がやろうと。しかしベルモンドが」

「いいじゃない。カノジョ連れて行けたんだしサア」

「ううむ」

「ホラホラ、私たちも帰ろうヨ」

カラカラと男が笑った後、そこには誰も居なくなっていた。

3・移世界（前書き）

また短いです。

ごめんなさい。

もっとわらってください。

3・移世界

「目を覚ますと、そこは異世界でし・・・あたしの部屋の天井だ」

期待はずれにも程があるオチに若干怒りを感じながら、今までの事を思い出す。

うん。あたしは謎の貴族とストーカーに・・・何されただろ。

「つーか、ここ、家だね？・・・ハズッ！ 今までの全部夢？ ありえない！」

そうだ。そもそもあいつらみたいなファンタジー的存在があるわけ無いだろう。

居たとしてもあたしの所にピンポイントで来るわけないし。

どこのB級映画だよ、ある日突然ファンタジーって。

「は、はは・・・良かった」

あたしは内心ホッとしていた。だって怖かったから、あの男が。

引いてしまう位に整った顔で、厭らしい視線を浴びせてくるあの瞳にはきつと魅了か何か魔法的な物が有るに違いない。

あたしらしくない考えだが、実際あいつの目を見ていると頭がぐるぐるしてきて、ついに行ってもいいかな、なんて気分になる。

何度イエスと言いつうになったことが。

ホッと息づいて、時計を見ると朝の七時半だった。

「やば、急いできがえなきゃ」

「ドウシテ急ぐの？」

「は？そりゃあ学校が・・・！？」

耳元に掛かる息。ここ最近何時も聞くあの厭らしい声。

「ククク、ズイブン驚いているネエ。良い力才だヨ。驚きと恐怖が入り混じってイル。アナタのそんな力才を見ると興奮するヨ、ク力カ力」

「・・・家に入って良いだなんて言ってます。住居侵入罪は三年以下の懲役または十万円以下の罰金ですよ？ あたしが通報する前にさっさと退散する事をお勧めします」

「アナタは賢いネエ。イイヨ。賢い女性は私の好みダカラネ」

「話聞いてましたか？ ああ、貴方は話を聞かない人でしたね。それじゃあ、あたし言う事は言ったので通報させてもらいます」

枕もとに置いてある携帯電話に手を伸ばす。ああ、こんなやり取り前にもあったような。

あの時は

「それは困るナア、クク」

いつの間にか取られたつけ。何なのだこいつは。

「すごい窃盗技術ですね。それを使ってスリにでもなれば良いじゃないですか。そして捕まってしまうばいい」

「アナタにだけダヨ、こんな事するのはネ」

「有難迷惑です。そんな事してあたしが喜ぶとでも思ってるんです

か？　だとしたら貴方はおそらく一生独身になるでしょう。あたしが言うのだから間違いありません」

「ククク、アナタは面白いナア。そしてカワイイ」

「あー・・・もういいです。それで、今日は何ですか？　また勧誘ですか？」

そうあたしが言うとなががおかしいのか、にやにやにやにや歯をぎらつかせて音もなく嗤った。

「気づかないのかい？　ソナ鈍いトコロも」

「御託を並べなくて結構です。はつきり言っして下さい」

強気にこいつの顔を睨むと、観念したのかやれやれと言った風に首を振り、窓を指さした。

「外をミテご覧。サテココハドコデショウ？　クククク」

彼の言動を訝しげに見ながら、恐る恐るカーテンを開け外を見る。

「え・・・何ここ・・・は？　え？　ここあたしの部屋だよね・・・でも外は」

外に広がる風景をあえて言うならば、イメージからなのだが、地獄。戦場。荒地。

そんな、凶悪なイメージのする風景だった。

「ドウだい、アナタにはドウ見える？　美シク見える？　ソレとも恐ろしい？　カカカカ」

死屍累々。その一言に尽きる。何処だここは。現代日本じゃないのか。

「どこ、ですか。ここ・・・」

「ここはネ、アナタ達で言う異世界サ」

「じょうだん、ですよネ？　どこかの紛争地とかでしょう？　じゃなかったら、映画の撮影とか・・・そうですね？」

嘘だ。そんな事を口にしてているがあたしは気付いてしまっている。こいつの顔が真顔だという事に。

そして死にそこなった人間のうめき声。じゅうじゅうとナニカが焼ける音。

窓を開けなくても聞こえて来る音はどれも聞き慣れないが、何故だか偽物とは思えなかった。

「クク、アナタは気付いているはずダ。何せ賢いカラネ・・・イヤ、慣れてないから分からないカナ？　ソウダ、近くまで連れて行ってあげヨウ。ソレがいい」

いかにもいま思いつきましたと言わんばかりにはっとした顔になり、にやにや笑いながら、あたしに一步一步近寄って来る。

「い、いや。来ないで」

「つれないナア。エンリヨするなヨ。私とアナタの仲ダロウ？　アナタくらいなら抱えて行つてあげるヨ」

そんな仲になった覚えは無い。

そうつつこむ余裕があるのだが、逃げれない。腰が抜けてるから。

いつの間にかがしりと掴まれたあたしは、小脇に抱えられなすすべもなく持ち運ばれる。

もはや暴れる気力もない。

こいつはあたしを抱えて窓を開け、そのすらりとしたスラリとした長い足を悠々と窓に掛ける。

「え？ ま、まさか跳ぶ気ですか？」

「ウン。あ、結構高さあるカラ、暴れないでネ？ 落ちると死んじやうからサア・・・ヨツと」

気軽に言ってくれる。あたしは高所恐怖症なのだ。

あたしの事はよそに、こいつはまるでちょっとした段差を飛び越えるように跳んだ。

「あ、ああむりむりむりむりむりああああ！・・・」

問答無用で紐無しバンジーを体験したあたしは赤子の手首をひねるより容易く気を失ったのだ。

4・決意（前書き）

難産でした。

今回はプロローグ終わりって感じです。

また短いですね。もっと長く書けるよう頑張ります。
こんかいはガチシリアスです。

4・決意

「・・・・・・はっ！・・・な、なんて事するんですか!？」
「情けないナア。でもまあイイモノ見れたしネ、クク」

覚醒したばかりの意識で思い出したのは、さっきの紐無しバンジ
ー。

ありえない。気を失う前に見た景色は、学校の屋上からの景色な
んて目じゃなかった。

「可愛かったナア、私の腕の中でスヤスヤと眠るアナタは。ソナ
に私の腕の中は気持ちが悪カッタのかナア？　クク」

「なに言ってるんですか気持ち悪い。気を失ってたんです。貴方の
せいですよ？　あんな行動普通じゃない」

「今さら私がフツウじゃナイと気づいたのかイ？」

「え？　自覚あったんですか？　意外です。無自覚だと思っていま
した」

くつくつと楽しそうに喉を鳴らし肩を揺らすのを見ると、普通に
格好良いのに。

「もったいないな」

「ソン？　何か言ったカイ？」

「いえ、何も」

「ソウ・・・ククク、まあイヤ・・・で、何時まで私はこうして
いればいいのかナ？　まあ私としてはずっとこのままでも構わない
ケドネエ、クク」

こいつに言われて、はて、と思わず首を傾げた。そしてすぐに気

付く。

所謂お姫様抱っこ。おそらくこの世の女性が小さい頃憧れたのではないかというシチュエーションにあたしはジャストミートしていた。

なぜ気付かなかったのだろう。相当な赤面ものである。

まあ顔には絶対に出さないが。

「貴方が離せばいいじゃないですか。それともあたしみたいな小さな少女が好みとか。うわあ、どん引きですね。やっぱりあたしが自分で降ります」

そういつて、体を擦ってこいつの手から逃れ降りる。その時にこいつを軽くけつとくのも忘れずに。

だが私は失念していた。こいつに連れて来られたところがどんな場所なのかを。

歩き出そうとしてナニカにつまずく。

「いてっ・・・何？・・・ひあ」

見なければ良かった。

地面には赤い水たまりが出来ており、そこには血みどろの、おそらく死体が横たわっていた。

それに躓いたのだ、あたしの体まで血みどろである。

とっさに彼の方を向く。あいつは嗤っていた。いつものように、

にたにたにたにた。

「な、に笑って」

「せっかク私が濡れナイように抱いていてあげたのにネ。今のアナタの力オ・最高だヨオ？クカ力カ力カ！　アーア、そんなに服を汚してしまつたら、ママに怒られちゃうヨ？　ククク」

何だ。何なんだその顔は。何が言いたい。

そんなにあたしが哀れか。そんなにあたしの不幸が可笑しいか。

「・・・んな」

こいつが現れてからおよそ一か月間、碌な事が無かった。

せっかくあたしは平穏な日々を過ごしていたのに。

学校ではそれなりに友達は居たし、勉強だつてそこそこ出来る方だった。

運動に至つては五十メートル走校内二位の実力である。文句なしだ。

それに容姿だつて、別にそこまで悪くは無いと自分では思つてるし、努力もした。

悪い事なんて一度もしたことは無い。親孝行もしてる。

なのに。

それなのに、なんであたしだけ。

何かがぷつんと、あたしの中で切れた気がした。

「ふざけんなっ！」

どうしてあたしだけこんな目に合わないといけないのか。

あたしよりも悪い奴なんていっぱいいるじゃないか。こっぴつ目に合って当然の奴とか、沢山いるじゃないか。

「なんであたしはつかなの!？」

「・・・・・・・・」

「黙ってないで何とか言つてよ!　どうしてあたしなの!？」

溢れて来た涙を袖で拭く、顔に血が付くが関係ない。

力いっぱいこいつの服を掴み、力いっぱい叫ぶ。

「帰してっ!　あたしを帰してよっ!」

「それはできないネ」

「何でっ!？　もういいじゃない!　十分楽しんだでしょ!？　いっつもいっつも私の事を笑って・・・・・・・・もうやなお・・・・・・・・もういやあ・・・・・・・・」

その場にへたれ込んで、喘ぎ泣く。涙が止まらない。

もう限界なのだ。あたしはそんなに強くない。強がつてるだけのただの人なのだ。

一か月も嫌な思いをして、突然変な所に連れて来られて、血まみれになって、耐えられる訳が無い。

不意に、あたしの手じゃない手に涙を拭われた。

「済まない。僕だって、君の様な別の世界の子供を連れて来たくは無かった。いい訳はしない、いや出来ないな。君は賢いから。」

一瞬誰だか分らなかった。顔をあげて、声の主を見る。

あいつだ。いつもにやにや笑っていた嫌な奴が、しゃがみ込んであたしの涙を拭っているのだ。

「それが、本性、です、か？」

「フフ、さあね………本当は僕たち大人が解決しないといけない事んだけどね。まして異世界人に頼るなんて、ダメな大人だよ」

そう語る彼の瞳は、憂いを帯びていて、年老いて見えた。

「この世界を救って欲しい」

「世界、ですか。冗談じゃ」

「無い、残念ながらね」

「随分一方的ですね。」

「馬鹿な事を言っているのは百も承知さ」

「じゃあ帰して下さい」

「できない、今すぐには」

ずいぶんな話だ。すぐには帰せないだの、世界を救えだの。

しかも、彼の顔は真剣だから困ったものだ。なんだこのギャップは。アニメのジャイ・オンと映画のジャ・アンくらいのギャップじゃないか。

「いつ帰してもらえますか」

「……………今この世界は三つの国が衝突している。元は一つだったのだが、所謂意見の違いが内戦を起こし、大きな戦争へと変わろうとしている」

「つまり、あたしにそれを止めろと」

「……………」

「ふざけんなって感じですね」

「すまない」

けど。やらないと帰れないのだろう。

「あたし簡単に死んじゃいますよ？それでも……………」

彼はあたしを立ち上げて

「僕が君を守るから、君は世界を救ってくれないか。この通りだ」

王に平伏するようにあたしに頭を下げた。

そんな彼は、痛々しくて、救いたいと思った。

「ずるいですよ、貴方」

「よく言われるよ」

やるしかない。自分で言うのもなんだがあたしは割とさばさばしている。

今はこの性格が有りがたかった。

「立って下さい……………あたしは何をすれば良いんですか？」

「……………」

「はい？」

「クカカカ！ソレでこそアナタだヨ。イイヨ。此処に誓おう。私の名はベルモンド・アルフォート。アナタの身を敵から守り、アナタの敵を踏み砕く、騎士となるヨ、ククク」

満足げに笑う彼に今までの様な邪さは無く、あたしに否が応でも決意をさせるものだった。

「あたしは坂本 叶子。あ、こっちじゃあカナコ・サカモトかな・・よろしく」

そう言って、あたしは手を伸ばした。

あたしの手を握り返す彼に初めて好意を感じたのだった。

5 ペルモンド（前書き）

なんだか進展のないぐだぐだした話になってしまいました。
罵って下さい。

ごめんなさい。

そして相変わらず短い。

ほんとすいません。

5・ベルモンド

「それである、ベルモンドさん？　あたしは何をすればいいの？

あたし特別力が強いとか、天才だったりとかしないよ？」

「クク、そんな事初めカラ期待していないヨ。カナコには、秤になつてもらう・・・ソレと、私の事はベルで構わないヨ」

あたしは今最初に居た部屋で取り調べを行っていた。

「はかり・・・えっと、それジョーク？　だとしたら相当センスないよ？」

「ヒドイナア、コレでも人を笑わせるのは得意なんだケド・・・」

「いや、面白い面白くないはどうでもいいから真面目に話してよ」

「真面目も真面目。大真面目サ・・・あー、えっと、何と言った力ナ。ソッチで言う審判？　みたいナ感じの・・・・・・さい、ばん？」

彼の言葉を考えると、あたしは何かの審判か裁判官みたいな事をすればいいのだろうか。

ああ、だから“秤”なのか。

「でもなんであたしなの？」

「ソレは偶々だヨ。まあ異世界人じゃナイといけナイ理由はあるけどネ。エ？　何か期待シタの？　もし力するとアタシはこうナル運命ダッタ・・・みたいナ？」

大ぶりの演技で、いやんいやんと体をくねらす様子はもしかなくとも滑稽で、不憫に思えた反面、あたしの事を気遣ってるのだろうかと徒な事を考えたが、あり得ないだろう。

「何ですかそのトンデモメルヘンな思考回路。あたしそう言う運命

とか信じないから」

「つれないナア。ノッテくれてもいいじゃナイか」

どう続けると言うのか。そうよ、あたし達は運命と言う名の鎖に縛られた・・・とかやればよかったのだろうか。

「いやです・・・あ、そう言えば、ベルはあたしの事守るって言ったけどどの位」

「強いのかって？」

「うん。正直強そうに見えないから。どこからどう見ても優男風には見えないし」

そうなのだ。彼は強そうに見えない。

いや、高い所から飛び降りても平気な所を見ると強いのかも知れないが。

そこまで強そうに見えないのである。

マジシャンが喧嘩をして不良をボコボコにする――

そんな情景あたしには想像できない。

「ソレもそうだね」

「え？ 否定して欲しい所なんですけど・・・まさか本当に弱いのか？ それなのにあんな大見得切ったわけですか？ 呆れてものも言えませんか」

「ククク、十分モノ申してくれてルじゃない力」

「比喻ですよ。そんな事も分からないだなんて、益々行く末が心配ですね」

そう皮肉ると彼は寧猛な笑みを浮かべ、あたしの両肩を掴んで首元に息が掛かる所まで近づけ、小さく呟いた。

「逃げて御覧」

ぞつとした。

首元に掛かる息も、艶のある声も、びくともしない彼の力にも。

「あ、あたしに勝っても仕方ありません」

「オヤ？何時もヨリ弱気だネエ、ククク」

「け、貶してほしいんですか？ 変態ですね」

「そうだネエ、カナコにならない力ナ、クク」

まずい、完全にこいつのペースだ。だがどうしてこういう状況になるのかが分からない。

何だこいつは。盛りの付いた雄犬じゃあるまいし。

「っ……い、痛いです」

肩に掛かる力が徐々に強まり、それとともに不安が増してゆく。

何だこれは。

ついさっきあたしを守ると言ったのは嘘だったのか。

目に力が入り、ぎり、と歯を食いしばってこいつを睨む。

「……やめて下さい」

「……クク」

しばしの沈黙の後、不意に響くノックの音。

ありがとう神様。何か急に信仰心が湧きそうです。

急に緩まる力。その隙にあたしは部屋の一番端まで後退る。

「ちえ」

ちえ、じゃない。

冗談じゃない。本当に危なかった。まだ顔を見ぬ御仁よ、ありがとう。

そう客の来訪に一息吐きながら、そういえばと思います。

「結局強いのか？」

「そこそこ、カナ」

そこそこ。十分ではないが一応のレベルにあるさま。そうか。そこそこか。

「なんか釈然としない。ていうかなんであたし襲われたのか？」

「クク、カナコが魅力的だからサ」

「それはどうも。・・・ずっとノックしてる外の人はいいいんですか？」

なんと律儀なのだろう。別に鍵はかかっていないのにもかかわらずドアを開けない紳士さ。

だが、やはり鬱陶しい。

「開けますよ？」

「ウン。どうぞ」

にやにやと笑う彼になんとかあまり抵抗がなくなってきた気がする。

こんな仕打ちを受けたのに、だ。しかもなんだか皮肉れない。

これから先が心配になる反面、今まで感じた事のない妙な気分になっっている自分に気付き、寒気がした。これはまさかの恋と言つものなのだろうか。

「いや、ありえないな」

そう。あり得るわけ無いのだ。気が動転しているだけだ。

なんだかもやもやとしたものを感じながら、あたしはドアノブに手を掛けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8977h/>

異世界の天秤

2010年10月10日05時01分発行